

何と書いてあるのか、サツパリ読めないが、すごく達筆である。

この焼物は磁気でなく陶器である。中国、朝鮮、内地いづれの焼物かわからないが、どう見ても骨董価値のあるような品物とは思われないし、又清朝の政治家が日本に来るのに、おぼろぎ湯呑を持参するだろか。おそれなくそんなことは考えられないので、この茶碗は春帆楼の乗客用に使用した、ありふれた茶碗をろうか。然し未客用にすれば形が大き過ぎるくらいがあり、やはりどこの家庭でも個人用に使うものとか考えられない。そうすると李鴻章が下痢の陶磁店かどこかで、ありふれた湯呑を買って、個人用に使っていたのかも知れない。

この茶碗にはキズがあり、口が欠け、ヒビがはいっている。このきづは二階から泉水に投げた時のきづと云われている。たれが陶器類の修理のうまい人に頼んで修繕したら、少しは樂しめる物になるのではないかと思っている。

(李正村文化調査委員、本正村三股)

追悼詩

嗚呼、立川輝信先生

羽柴弘

去る七月二十三日夕刻、大分探勝アルコウ会より、立川先生急逝、二十五日御葬儀に、高木会長と共に参列す、帯来感ありて。

大分の空に 高だか、

師と仰き 慕い望みし、

又会友として親しみし、

巨いなる星、

音もなく 影を失ふ。

群星の中に交りて、
アルコウ会という独自の道を、
八十のよばひも忘れ、
ひたまきは歩ける姿、

嗚呼、立川先生 今日亡し、

左とへれは夏の夜空の、
南天の星座 さそり座、
その先登 一きはさやか、
またたきつつ赤く輝き、
群星をひきいてめぐる、

嗚呼 アンタールレスに似たるかな、

或る時は尺間嶺を小き、
海山の勝れたる景観、
眼をぬぐひ賞でてながめし、

或る時は瀬戸浦を歩き、
泉勝の海藻さざげし古事語り、

つい先の日は、御希望の堅田路に、
豊薩の古戦場を歩らひ、
手に杖し、歩かせたまふ。

嗚呼 立川先生は今亡し、

その姿 王者の如く、

その声は銀鈴に似たる、
たくましかりき、その日のごとく、

この後と われらを日率て

導きたまへ、とこ永久に。